

大阪信愛学院大学

2025年度 一般選抜 前期 試験問題

国語

2025年1月29日

解答時間 60分

受験番号	氏名

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 問題冊子は、この表紙を除いて14ページあります。試験開始後、はじめにページの脱落がないかを確認、脱落などに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
- 問題は2題あります。
- 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの鉛筆またはシャープペンシルを用いて、正確にマークしなさい。解答用紙の所定欄以外の余白部分には、何も記入してはいけません。

例えば、**10**と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の(例)のように
問NOの10の解答欄の②にマークしなさい。

(例)

問NO	解 答 欄
10	① ● ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- この問題冊子の各ページの余白は、下書きなどに適宜利用してかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- この問題冊子および解答用紙は、持ち帰ってはいけません。

【第1問】

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一人ひとりが持つ世界、一人ひとりが生きていかねばならない世界とは、いったいどのようなものとして理解したらよいのであろうか。これは具体的には、まずもってその人の意識の広がりと内容のことと言ってよいであろう。I、その人の心のスクリーンに何がどのように映っているかという世界であり、また同時に、そうした映像をもたらす心のスクリーン自体のあり方、そして時々刻々の映像をもたらす経験や記憶の倉庫からなる世界である。より具体的に言えば、その人が自分の目を通じて見、自分の耳を通じて聞き、自分の肌で感じ取り、自分の頭で意味づけたり判断したりしている世界であり、また、その土台となっているその人独自の心理的な基盤やストックである。我々の誰もがこうした世界を内面にはらみながら、それぞれなりに行動し、また互いに会話しているのである。この観点からすれば、我々が他の人に出合い、共に語り、互いに笑ったり喧嘩したりしているというのも、そうした銘々持ちの内面世界の中で生じている一つの映像というだけのことなのかもしれないのである。

一人ひとりの内面世界に映っているものは、同じところで同じものを注視していたとしても、あるいは同じことを同じようにやっていたとしても、当然のことながら、決して同じではない。たとえばどこかの繁華街を、五人くらいで連れだって歩いてきたとしよう。そして、何がインシヨウに残ったか一人ひとりに話してもらうことにするとしよう。そうすると各自が全く異なったことを口にするはずである。ある人は、街を行く人達のフアッションについて、またある人は、人々の顔付きや表情といったことについて、またある人は、街の此処かしこに増えてきたオシヤレな飲食店の様子について、自分の目にとまったところを語るであろう。同じ街を連れだって歩いても、目に入ってくるもの、心を魅かれるものが全く異なるのである。

同様に、何人かで連れだって音楽会に出かけて、たとえばベートーベンの交響曲「田園」に耳を傾けたとしよう。そこでも、それぞれの心のスクリーンに去来するものは全く異なるはずである。同じ環境で、同じようなソファアに座って、同じ器乐的ハーモニーに身を任せていたとしても、それぞれの人の音楽的空間は全く異なったものになるのである。まさにXと言すべきではないだろうか。

だからこそ、誰かに何かを一所懸命説明しているような時、あるいは誰かと激しく議論しているような時、非常にもどかしい思いをすることがあるのである。これだけ言っているのに、なぜ分かってくれないのだろう。こんな当り前のことを相

手はなぜ受け入れようとしなのだろう。わざと分らない振りをしているのか。根が素直でないのか。それとも、こちらに悪意を持っているのか。こういった思いが段々強くなり、腹立たしく我慢ができなくなつて、いつそ相手の頭の中に手でも突っ込んで、素直な考えになるよう整理してやりたい、といった衝動に駆られることにもなるのではないだろうか。

こうした思いや衝動は、無理からぬものである。しかし、これは本来、一種の「ない物ねだり」でしかない。他人に自分の期待する通り、あるいは自分と同じように、感じさせたり考えさせたりするのは、しよせん無理なことである。他人の頭の中は、こちらの思うままには左右できないのである。だからこそ、説得の技術が古来人々の関心を集めたのであろうし、催眠や洗脳によって他人の考え方を完全に左右する、といった類の研究が熱心に行なわれてきたのであろう。

自分にとっての「当たり前」は、他人にとって必ずしも「当たり前」でない。自分にとっての現実とは、他人にとって決して現実でない。〈私〉の生きている世界と他の人の生きている世界とは、根本から異なっているのである。Ⅱ、われわれは日常、こうした事実をころつと忘れてしまっている。そして、誰もが自分と同じように感じている、自分と同じように考えている、という前提で生活してしまっているのではないだろうか。

他の人を本当に理解しようと思うなら、その人にとっての「当たり前」、つまりは、その人にとっての現実や（イ）真実を知らなくてはならない。そのためには、その人自身の内面世界のありようを、その人自身の内的な枠組みに則してドウサツ、了解するよう努めるしかないであろう。つまり、自分はその人の発言や行動についてこう思う、というのではなく、その人自身は自分の発言や行動をこういうつもりで（意味で）やっているのだ、ということを見てとるように努めなければならないのである。

例えば、親や教師の方で好意なり善意なりから子どもに何か言ってやったりしてやったりしたことなのに、相手からは反発されたり、迷惑顔をされたりすることがある。こうしたすれ違ひはよくあることであるが、多分これは子ども自身の内的な枠組みを見過ぎたために生じたことであろう。例えばその子どもに対して強い愛情を持っていたとしても、それだけで相手のことを理解できるわけではない。その子どもに対する愛情が親や教師の側に思いこみを生み出し、その子ども自身の独自の世界を理解する上でかえって邪魔になることもあるのである。

例えば親切な気持ちに溢れていたとしても、それが一方的な押し付けになったのでは、それを受ける方で大変である。いくら愛情があつたとしても、その愛情のために自分の思い込みだけで相手にかかわっていくのでは逆効果でしかない。相手の側の事情を無視したまま真心を尽くしたとしても、相手の方では大迷惑ということがよくあるのである。

それだけではない。

Y

に誰か他の人の態度や行動を見ていったとしても、またその人についてのさまざまな事実を集

めていったとしても、それだけではその人を理解するのは困難である。

(中 略)

例えば、一人の男が急に立ち上がって、薄笑いを浮かべながら、こちらに近付いて来たでしょう。そういう場合、あなたならどうするであろうか。もしあなたが、その男は何か冗談半分に、ふざけて近付いてきたのだろうと思えば、笑顔を作って待ち受ければよい。しかし、その男は何かの間違いであなたに憎しみを持ち、殴りかかろうとして近付いてきたのかもしれないと思えば、注意深く、相手の顔から目をそらさないようにしながら、いつでもその場から走って逃げられるよう準備しなくてはならない。あるいは、その男は、初めからインネンをつけて恐喝でもするつもりで近付いてきたのではないか、と思つたら、面倒なことにならないよう大急ぎでその場を逃れた方がいいであろう。このように、相手の外的な態度や行動それ自体より、それを支えている内的枠組みの方に見当をつけなくては、我々はどう対応したらいいのか判断できないのであるが、その見当のつけ方がまた難しいのである。

(中 略)

このように考えてくると、簡単に、「現実には……」とか「客観的には……」などと語ることができなくなるのではないだろうか。誰もが、自分自身に対して現れている世界こそ、客観的な現実そのものと信じているのである。自分の見ているもの、聞いているもの、感じているものこそ、客観的に厳然として存在しているはずの世界に相違ない、と思ひ込んでいるのである。

しかし、本当のところは、「銘々持ちの現実」「銘々持ちの客観世界」が、そこに居る人の数だけ併存しているわけである。別の言い方をすれば、「本当の客観的な現実世界」がたとえ存在するにしても、我々に与えられているのは、それぞれの心のスクリーンに映し出された、それぞれなりの主観的映像としての「客観的な現実世界」でしかないのである。つまり実際には、何処にも「客観的世界についての正しい認識」など存在する余地はないのである。

この点においても我々は、日常的なものの見方考え方を百八十度テンカンしなければならぬであろう。我々はどうしても、共有の世界、共有の現実の中で誰もが生活している、という大前提でものを考えてしまいがちである。そして、そうした共有の現実を我々一人ひとりがどのように意識化し、それに対してどう反応するか、という視点から全てを考えてしまいがちである。しかし、この習慣化された日常観念は逆転されなければならないのである。

共有の現実はあるかもしれないし、あるいは単なる幻想かもしれない。いずれにせよ、具体的に存在しているのは、一人ひとりを持つている現実であり、また一人ひとりの現実に対する一人ひとりな対応の仕方ではない。たしかに、同じ生物種の種に属するということで、同様の目や耳や頭のコウゾウと機能を持つわけであるから、それぞれの持つ現実の中身は結果と

して類似してくるかもしれない。また、同じ時代の同じ文化の中で育っていくとすれば、共同幻想と呼ばれるほど強力な共通の視点や観念に幼児期からさらされ続けるわけであるから、各自にとつての現実が結果的にほぼ同一のイメージ内容を持つこともあるかもしれない。このため、人は誰しも同じような認識や感情を持つものだ、と言った方が適切に思える場合があるいはあるかもしれないが、やはりそれはそうでないのである。一人ひとりが一人きりで生まれ、毎日の生活を通じて自分だけの体験を体験していくのである。類似した現実を持っているように見える場合であっても、その内実は一人ひとりの微妙に異なつてこざるをえないのである。これまで何度も述べたように、ここに着目するかどうかが、こうした一人ひとりの持つ現実の根本的相違を重いものとして受け止めるかどうか、真の人間理解を進めていく上でのポイントなのである。

（梶田 叡一『意識としての自己』より。出題の都合上、一部省略あり。）

問 1 傍線部（ア）～（オ）のカタカナに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 1 ～ 5

（ア） インシヨウ ① 人に仕事をシヨウカイする ② 国内のキシヨウを観測する ③ 囲碁やシヨウギをする

1 皇位をケイシヨウウする ⑤ 本番にシヨウジュンを合わせる

（イ） ドウサツ ① 新しい工場をシサツする ② サツエイの進行を把握する ③ 会報をインサツする

2 県の事業にニュウサツする ⑤ 丁寧なアイサツを交わす

（ウ） インネン ① 不利な証拠をインペイする ② ゴウインなやり方に反発する ③ 契約書にオウインする

3 失敗のヨウインをさぐる ⑤ コンイン届を提出する

（エ） テンカン ① 好プレーにカンセイがわく ② ゲンカンの扉を開ける ③ 部屋をカンキする

4 重症のカンジャを治療する ⑤ 京都へカンコウに行く

（オ） コウゾウ ① 車の輸入がゲキゾウする ② 穀物をチョゾウする ③ 車両をカイゾウする

5 キゾウされた本を整理する ⑤ シンゾウの鼓動がはげしい

問 2 空欄 I ・ II に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 6 ・ 7

① かしながら ② むしろ ③ および ④ そのうえ

⑤ ところで ⑥ あわせて ⑦ つまり

問 3 空欄 X・Y に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 8・9

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ① 虚心坦懐 | ② 二束三文 | ③ 广大无边 | ④ 同床異夢 |
| ⑤ 臨機応変 | ⑥ 虎視眈眈 | ⑦ 一触即発 | ⑧ 因果応報 |

問 4 傍線部 A 「銘々持ちの内面世界」とあるが、その内容として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 10

- ① ある人が持っている心理的な基盤やストック。
- ② 自分の頭で意味づけたり判断したりしている世界。
- ③ 他の人に出合い、共に語り、笑ったり喧嘩したりすること。
- ④ ある人の心に時々刻々の映像をもたらす経験や記憶の倉庫。
- ⑤ ある人に映像をもたらす心のスクリーン。

問 5 傍線部 B 「非常にもどかしい思いをする」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11

- ① 相手が自分の主張をわざと分らない振りをしていることが腹立たしくなってきた、我慢することが限界になるから。
- ② 相手が自分に対して、悪意を持って接しているという猜疑心さいぎが心の中に生まれて、次第に広がっていくから。
- ③ 相手が当たり前のことを受け入れる素直さを持っていないことを非難することにより、相手との溝が深まるから。
- ④ 催眠や洗脳によって相手を思い通りに従わせる技量を持っていないことが、不甲斐なく感じられてくるから。
- ⑤ 相手は自分とは根本が異なる世界にいるため、相手の頭の中で考えることは、自分の思い通りに左右できないから。

問 6 傍線部 C「こうしたすれ違い」とあるが、すれ違いが起きる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 12

- ① 好意や善意から親や教師が子どもにかかわったとしても、一方的な押し付けは受ける側にとって迷惑だから。
- ② 子どもに対する愛情の強さが親や教師に思いこみを生み出し、子ども自身の内的世界を壊してしまうから。
- ③ 相手側の事情をしっかりと理解し、真心を尽くさないと、相手から誤解を受けることがあるから。
- ④ 親や教師の思いを積極的に理解しようとしないうちには、愛情のある行為さえ邪魔に感じられるから。
- ⑤ 子どもの態度や行動を観察し、子どもについての事実を集める努力なくして、子どもを理解することは不可能だから。

問 7 傍線部 D「習慣化された日常観念」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 13

- ① 具体的に存在するのは、一人ひとりが持っている現実であり、一人ひとりなりの対応の仕方ではないという考え方。
- ② 同じ時代の同じ文化の中で生きているのだから、各自にとっての現実の結果的に同じイメージ内容を持つという考え方。
- ③ 我々に与えられるのは、心のスクリーンに映し出された主観的映像としての客観的な現実社会ではないという考え方。
- ④ 我々は共有の世界、共有の現実の中で全ての人が生活し、そうした現実に対して個々に反応しているという考え方。
- ⑤ 同じ生物種の種に属しているため、一人ひとりが持つ現実の中身は結果として類似していくであろうという考え方。

問 8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は 14 ・ 15

- ① ベートーベンの「田園」のような名曲を同じ環境において聞けば、人はみな同じように感動する。
- ② 自分にとっての現実とは、他人にとって決して現実ではなく、他人は自分と違う世界を生きている。
- ③ 子どもに対して強い愛情を持つことができれば、親が子どものことを理解することはたやすい。
- ④ 見知らぬ男が薄笑いをしながら近付いてきたら、その態度や行動に気をつけることが何よりも重要である。
- ⑤ 人はみな一人きりで生まれ、毎日の生活を通じて人とは異なる体験をして生きているものである。
- ⑥ 自らが見ているもの、聞いているもの、経験しているものこそ客観的に存在している世界である。
- ⑦ 共同幻想と呼ばれるほど強力な共通の視点や観念に幼児期からさらされるのはとても危険なことである。

【第2問】

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

社会とは何なのでしょう。まるで当たり前のように扱われがちなこの言葉ですが、実はよくわからない点が多い。にもかかわらず、それを当たり前のように論じることによって、特定の考え方を「密輸入」している場合が多いのです。

社会など存在しない、という言い方をする人びともいますが、その場合には、何か他のものがあることを前提としています。たとえば、「個人」はあるとされます。個人はカッゴ(ア)としたものとしてもそこにある、疑う余地はないとされる。しかし、その個人というものはどうやって形成されたのか。人は生まれてきた状態のままで、人として暮らしていくことができるのでしょうか。

社会が契約によってつくられたとする社会契約論の理論家たちは、そうした個人がいるだけの状態を「自然状態」^Aとしてまず想定しました。社会以前の状態から社会にどう移るかを描こうとしたわけです。それでも、彼らの議論で、本当に素のままの人間のあり方について論じることができたかについては、さまざまな疑問が浮かびます。

何よりもまず、自然状態では、人びとは言葉を通じて関係をもっているとされる。いくら人が狼に喩えられ、暴力が容赦なく用いられることが強調されようとも、他方で人びとが言葉によって結びつくことはそこで前提とされています。だからこそ、社会の設立について、契約で合意することもできるわけです。しかし、共通の言語をもつためには、あらかじめ、ある範囲の人びとの間で長期にわたって深い交流がなければならぬのではないのでしょうか。

これに関連して、自然状態では、人びとは契約というものについて同じ考え方をもち、しかも契約は守られなければならないという強い意識をもっていることが前提とされています。これは、かなり高度な内容を含む合意です。単に口から出ただけの言葉によって縛られるという考え方は、決して自然なものではないからです。

その上、自然状態で、人びとは自分たちにかかわりのある人間の範囲がどこまでなのかを、すでに知っているようです。だからこそ、契約なるものが可能になると想定できるのでしょう。ある範囲の人びとが契約に参加することで、はじめて社会契約は成立したものと見なされるはずですが、しかし、その範囲がいつどのようにして決まったのかは、不明のままです。誰と誰が契約の当事者なのか、そして、なぜその人びとなのか、ということは明らかにされず、まるで当たり前のように話が進みます。しかし、もしもある一定の範囲の人びとが、そして彼らだけが、ともに社会契約をすべき人びととして特定できるとすれば、そこにはすでにある一つの「群れ」があるはずです。この「群れ」はいったい何なのでしょう。それは契

約に先立って、場合によっては戦争やセイフク^(イ)などの結果として成立した単位なのではないでしょうか。

このように、社会が存在しない状態について考えることもとても難しいのです。にもかかわらず、社会などない、個人だけが存在するという言い方をする人がいるとすれば、それはやはり、^B何らかの意図にもとづくものです。人びとの間のつながりを弱いものと見なし、人がみな、個人として当然に自立できると考え、福祉国家など必要ないと主張するといったことです。しかし、人は思った以上に、他の人びととの複雑な関係の中で暮らしているのではないのでしょうか。そうしたいろいろな関係の中で、「社会」と呼ばれるものは、どこまで独自のものと言えるのか、考えてみたいと思います。

社会について論じるにあたって、それを何よりもまず市場と区別し、社会と市場との間に鋭い対立を見出そうとする人びとが多くいます。「社会的なもの」という言葉を大切にし、それに特別な意味を与えようとする人びとのほとんどが、市場を敵視し、市場における人間のあり方とは根本的に異なる関係の場として、社会というものを考えようとしています。

社会的なものを大切にする人びとは、たとえば「連帯」という言葉を好みます。連帯とは人びとが支え合うということであり、生活に必要なものを相互に分け合ったり、さまざまな不運に遭遇したときに、それを補い合ったりする関係がそこでは想定されています。これに対して、市場では人びとは自己の利益だけを追求し、相互に支え合わないということが強調されます。

しかし、市場も、ある意味では人びとが支え合う関係を伴っています。市場があることで、人びとが必要を満たすことができる場合があるからです。逆に市場がないために、生活に必要なものを得ることができない場合もあります。また、不運に遭遇したときの助け合いについても、保険制度をはじめとして、さまざまなものが市場の中に用意されています。保険とは、加入者があらかじめ掛金を払い、病気や事故など困難に直面したときに保険金の支払いを受けるといふ制度です。そこでは、一度も病気にならず、事故にもあわずに、支払いを受けなかった人も文句を言わないことになっています。

保険制度には、もともと市場的な側面と連帯的な側面との二面性があるからだ、ともいえるかもしれませんが、それなら市場一般についてはどうでしょうか。

たしかに、市場では利益をめぐる厳しい競争が繰り広げられ、個人も法人も競争に敗れば退場を^(ウ)ヨギなくされます。その有様は、I自然状態を思わせます。しかし、すでにみたように自然状態でさえ、人びとは言葉を共有し、そればかりか多くのルールを共有していると考えのほかありませんでした。市場も、それが安定的に維持されるためには、それに参加する人びとの間に何か共有されているのではないのでしょうか。人びとがさまざまな交換を行う際に、自分がだまされないかどうか、つねに不安を持ち続けているようでは、^(エ)エンカツな取引ができるはずがない。人びとの間に一定の信頼関係があ

ることが、経済関係がうまくいく上での一種の資本となっている、という考え方もあります。

これは、個々人の善意といった **X** なものではないかもしれませんが。むしろ、それぞれの人が自分の長期的な利益を考えた結果なのかもしれない。単に短期的な利益を追求するのであれば、人をだましたり不正をはたいたりするのが合理的な場合もある。しかし、自らが市場の中にとどまれるようにするために、市場から追い出されるような行動は慎むのが合理的となります。問題は、こういう動機によって行動していることを、社会的な連帯と同じようなものと見なすことができるかどうかです。できない、と答えるのは簡単でしょう。^c 人びとの行動の動機が根本的に異なっている、と考えるのならそうなります。市場が利己的な動機に支えられているのに対し、社会的連帯は利他的な動機にもとづくといった区別にこだわるのならば。

けれども、人間の行動の動機付けを、そのように **Y** に分けることができるでしょうか。純粹な愛情にもとづくと考えられている行動の背後に打算を、欲得ずくと見える行動の背後に、打算を超えた何かを見てとることができる場合もあるのではないか。

たとえば、最も純粹な「情愛」による集まりと見なされがちな家族についても、そこにはさまざまな関係が隠されているかもしれません。ある時期に尽くすことで、自分が病気になったり高齢になったりしたときにサーヴィスを受けたいという、一種の保険制度のような役割を期待している側面もあるかもしれません。

こうしたことを一つ一つ詮索してみても仕方ありません。何らかの調査によって、家族の構成員の「真の動機」を探り当てることもできると思えない。人は本当のことを答えるとは限らないし、それ以前に、自分自身の行動の動機を知っているのかさえわからないからです。家族についてそうだとすれば、他の場で、連帯の背後に取引が、取引の背後に連帯があったとしても不思議ではないでしょう。社会と市場とを分ける境界線の根拠も、**II** 確かなものではないのです。

このような議論に対しては、次のような意見があるかもしれません。まず、たとえ人間の動機が複雑であるとしても、だからといって、人間の動機を類型化しなくていいのか。利己的な動機と利他的な動機といった区別は、少なくとも傾向としてはあるのではないか。利己的な場としての **a** と、^(オ) 利他的な場としての **b** とを分けることが無意味とは言えない。歴史的に見ても、市場競争の中で従属的な地位に置かれ、クギヨウに陥った人びとに対して、どう手を差し伸べるかという関心が、社会的なものへの要求を生み出したのだ。社会は市場との対比の中で考えられてきた。そのことの意味を軽視することはできない。そして今、世界大での競争の激化が言われる中で、**c** は明らかに肥大化し、暴走している。これを食い止めるためにも、市場と切り離された社会というものを想定するのが有利である、といった議論です。

たしかに、市場／社会という境界線を引くことはできるし、それによってもたらされるものも多いでしょう。しかし、そうした境界線が自明ではないことを意識し続ける必要があるのではないでしょうか。社会的なものを大事にする人びとは、あらゆる悪や矛盾が **d** の中にあると想定し、その一方で、 **e** というものを悪や矛盾とは一切無縁な場と見なす傾向があります。しかし、すでに見たように、家族をもっぱら情愛の場と見なすことは、私たちの目をくもらす面がある。そこは情愛の場であると同時に、取引と言えるようなものや、権力関係と呼べるようなものが存在している場でもあるかもしれません。

家族・社会・市場・国家といったものを、単純化された形で定義することは、確かにある種の対比を明確化しますが、同時に、何かを隠すことになるのです。

(杉田敦『政治的思考』より。出題の都合上、一部省略あり。)

問 1 傍線部(ア)～(オ)のカタカナに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は **16** ～ **20**

(ア) カツコ ① コセイの強い人に会う ② コジンの死を弔う ③ すすめられた役職をコジする

16 ④ 呼びかけにコオウする ⑤ エンコの長さを求める

(イ) セイフク ① 菓を毎日フクヨウする ② オウフクにかかる時間を考える ③ 友人の成功をシユクフクする

17 ④ 感情のキフクが激しい ⑤ フクブに違和感がある

(ウ) ヨギ ① 小説やギキョクを書く ② 計画についてヒヨウギする ③ 柔道のミヨウギを競う

18 ④ 雪道を行くのにナンギする ⑤ 窃盗のケンギがかかる

(エ) エンカツ ① リヨウエンに恵まれる ② エンマンな人柄に癒される ③ エンカイで歌を披露する

19 ④ 京都のテイエンを散策する ⑤ 味方のキュウエンを待つ

(オ) クキョウ

20

- ① 留学にキョウミがある
② クッキョウな選手に会う
③ 試験に合格しキョウキする
④ エッキョウして亡命する
⑤ 友人の気持ちにキョウカンする

問 2 空欄 I ・ II に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 21 ・ 22

- ① じつと
② とても
③ まさに
④ まさか
⑤ さほど
⑥ やつと
⑦ もつと

問 3 空欄 X ・ Y に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 23 ・ 24

- ① 民主的
② 懐疑的
③ 図式的
④ 流動的
⑤ 威圧的
⑥ 圧倒的
⑦ 倫理的
⑧ 革新的

問 4 傍線部 A 「自然状態」とあるが、社会契約論の理論家たちが想定した自然状態の内容として 適当でないもの を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 25

- ① 人びとは契約を守らなければならないという強い意識をもっている。
② 人びとは契約について同じ考え方をもっている。
③ 人びとはかわりのある人間の範囲がどこまでなのかがわかっていない。
④ 人びとが言葉によって結びついていることが前提となっている。
⑤ 個人がいるだけで社会が存在しない状態である。

問 5 傍線部 B 「何らかの意図」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 26

- ① 個人と社会は対立するものであって、相入れないものである。個人に重きを置かなければならないということ。
- ② 社会の中では個人は埋没する恐れが強く、存在があやぶまれるので、正しい社会を形成する必要があるということ。
- ③ 社会を形成する「群れ」の存在は戦争などの惨禍の結果生まれたので、そのような社会は作らなくてもよいということ。
- ④ 個人的な利益に固執する社会では個人は被害をこうむるので、社会を正しく作り上げていかなければならないということ。
- ⑤ 人とのつながりは弱く、すべての人は個人として当然自立することができるので、社会を作る必要はないということ。

問 6 傍線部 C 「人びとの行動の動機が根本的に異なっている」とあるが、その内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27

- ① 人びとは支え合いたいという動機から社会と市場に参加しているが、その動機の強さが大きく異なること。
- ② 人びとは市場から追い出されることを避けるという動機で社会に参加するが、それは利己的であるとは言えないこと。
- ③ 人びとはお互いに助け合いたいという動機で社会に参加するが、市場に参加する際にはその動機が弱いということ。
- ④ 人びとは利他的な動機で社会に参加し、利己的な動機で市場に参入しているということ。
- ⑤ 人びとは保険制度というものを、市場の中ではなく社会の中で実施されるべきものであると考えていること。

問 7 空欄 a e には、「社会」と「市場」のいずれかの言葉が当てはまるが、その言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ⑥ | a | 社会 | b | 市場 | c | 社会 | d | 社会 | e | 市場 |
| ⑤ | a | 社会 | b | 市場 | c | 市場 | d | 社会 | e | 市場 |
| ④ | a | 社会 | b | 市場 | c | 社会 | d | 社会 | e | 市場 |
| ③ | a | 市場 | b | 社会 | c | 市場 | d | 社会 | e | 市場 |
| ② | a | 市場 | b | 社会 | c | 市場 | d | 社会 | e | 社会 |
| ① | a | 市場 | b | 社会 | c | 社会 | d | 社会 | e | 市場 |

問 8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は

29

・

30

- ① 筆者は、家族・社会・市場・国家というものを、単純に定義することには賛成していない。
- ② 筆者は、社会契約が成立したと見なされる範囲がどのように誕生したのかが明確に示されていると考えている。
- ③ 筆者は、保険制度において一度の支払いも受けない人がいることは、矛盾のあることだと考えている。
- ④ 筆者は、社会契約論の理論家たちが素のままの人間のあり方を論じること成功したと考えている。
- ⑤ 筆者は、家族という関係においても、その行動の背後に一種の打算があることは否定できないと考えている。
- ⑥ 筆者は、家族の構成員が行うことの真の動機を知ることが、難しいが可能なことだと考えている。
- ⑦ 筆者は、市場と社会の間に境界線を引くことは無意味で、すべきことではないと考えている。